

## 他者からの否定的な評価場面における怒りと不安の相違

The differences between anger and anxiety  
in the scenes of negative evaluation from others

藤岡

緑 (Midori Fujioka)

指導：根建 金男

## 【問題と目的】

これまで怒りと不安の類似点や怒りと不安を比較した研究は数多く行われてきている。しかし、怒りと不安のどちらも喚起し得る他者からの評価場面において、なぜ怒り、あるいは不安という異なる感情が生起するのかについて、あまり研究されてきていない。他者からの評価場面において、怒り傾向の高いもの、不安傾向の高いものの注意の向け方や出来事に対する解釈の仕方、またその傾向について検証することは、臨床場面における介入技法に影響を与えられと考える(Wenzel & Lystad, 2005)。

そこで、本研究では特性怒りと特性不安の構造について検証する。さらに怒りと不安のどちらも喚起し得る場面において、それぞれの注意の向け方や解釈の仕方について検証し、怒りと不安の違いを明らかにしていく。

## &lt;研究 1&gt;

## 【目的】

研究 1 では特性怒り、特性不安、評価不安、認知、注意の焦点の因子間の構造を明らかにする。

## 【方法】

学生 455 名を対象に、質問紙による調査を行った。そして、共分散構造分析を用いて仮説を元にモデルを作成し、分析を行った。

## 【結果と考察】

分析の結果、仮説を元に作成したモデルにおいてほとんどのパスに有意差がみられた。「特性怒り」と「特性不安」は強い相関関係にあることが示され、これは先行研究(e.g., 増田, 2000)と一致する結果となった。また、「特性怒り」、「評価不安」、「特性不安」は「他者に焦点付けられた注意」に影響をあたえており、「評価不安」、「特性不安」は「自己に焦点づけられた注意」に影響を与えていることが示された。さらに、特性不安、特性怒り、評価不安の高い人ほど他者からの不当な扱いを認知しやすく、またそのような場面において怒りや不安感情が喚起されやすいことが示唆された。その他、特性怒りと特性不安、評価不安がそれぞれ関連する認知が示された。

## &lt;研究 2&gt;

## 【目的】

研究 2 では、他者からの評価場面において評価される側

の人が、他者と自己の動作に向ける注意に焦点を当て、実験場面について向けられる注意が怒りと不安に与える影響について、実験研究より検討を行う。

## 【方法】

特性怒りの高い怒り高群 11 名と、特性不安の高い不安高群 8 名と、特性怒り、特性不安ともに低い怒り・不安低群 10 名を対象に、否定的な評価場面として就職面接場面を設定した。実験参加者には面接官の前で 3 分間の自己 PR をさせた。そして、その 3 分間の間に、実験協力者には決められた条件の中、決められた動作を行わせた。

実験前後では、怒り、不安、注意の焦点、原因帰属を測定する質問紙の評価を求めた。

## 【結果と考察】

否定的な評価場面における自己に焦点付けられた注意について、実験前後の 3 群間の差を検証した結果、怒り高群の平均値が他の 2 群に比べ有意に高いことが示された。また、自己の動作に向けられる注意の程度とその正確さについては群間に差はないものの、自己のリラックスしている程度や生理的な反応については、怒り高群は他の 2 群に比べて注意を向けやすいことが示された。

他者に焦点付けられた注意について、実験前後の 3 群間の差を検証した結果、特性別に他者に向けられた注意の程度の差を見出すことは出来なかったが、実験中実際に面接官が行った動作へ向けた注意の程度とその正確さにおいては怒り・不安低群の方が高い傾向にあった。この結果から、不安高群は怒り・不安低群に比べて、実際には他者の反応を正確に処理していない傾向が示唆された。

## 【総合考察】

研究 1 の結果、注意に特性怒りと特性不安の影響について検討したところ、両者とも影響を与えていることが示された。一方、実際の実験場面では、一部仮説が支持される結果となった。これは、普段注意を向けていると感じている程度と実際の場面で注意を向けている程度に差があったと考えられる。

今後はより多面的な研究を重ね、怒りと不安の相違点や注意の焦点について詳細に検討し、それぞれの注意、解釈の特徴を明らかにすることで認知の再体制化やセルフモニタリングなどに影響を与えることが期待される。